

## 資料と公共性 : 2021年度研究成果年次報告書

岡崎, 敦

九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

池上, 大祐

琉球大学国際地域創造学部 : 准教授

今井, 宏昌

九州大学大学院人文科学研究院 : 専任講師

多川, 孝央

九州大学情報基盤研究開発センター : 准教授

他

<https://doi.org/10.15017/4772780>

---

出版情報 : 2020-03-07. 九州大学大学院人文科学研究院

バージョン :

権利関係 :

## つながりのなかにあること／つながりをつくること —情報管理専門機関と専門職の新たな役割—

清原 和之

現代の情報・社会環境において、資料・情報の管理を専門とする組織が果たすべき役割とは何か。また、資料・情報管理を担う専門職にはいかなる資質が求められているのか。こうした課題に対し、2021年11月27日、「情報管理組織のミッションと専門職養成」と題するシンポジウムが開催された。

当シンポジウムでは、岡崎敦氏の趣旨説明に始まり、国立国会図書館所属の大沼太兵衛氏、立教大学共生社会研究センターの平野泉氏の二名が登壇者として報告され、九州大学附属図書館所属の渡邊由紀子氏のコメントの後、フロアを交えたパネルディスカッションが行われた。本稿では、岡崎氏が提示された三つの論点に沿って、シンポジウム全体を改めて振り返り、若干の所感を述べてみたい。

一つ目の論点は、「情報化の新たなステージにおける資料・情報資源管理の性格とは何か」というものである。この点に関して、「デジタル時代に求められる司書の専門性とは」と題された大沼報告は、明快であった。すなわち、いま現在、現場で求められている業務の一つとしてデジタルアーカイブ (DA) が採り上げられ、これからの司書には、DAを「つくる」「まもる」「みせる・つかう」というプロセス全般にわたるマネジメントへの関与が求められている、ということが具体的な作業フローに沿って示された。図書館のあり方が「所蔵資料を提供する機関」から「情報のハブ」へと変化していくことが求められる中において、司書に求められるスキルも、特定のコンテンツへの理解から、情報管理に関わる技術や倫理、法制度全般の理解へと変化してきていることは、音楽分野の主題司書でもある大沼氏のキャリアからも窺える。また、渡邊氏のコメント報告でも、現在の大学図書館に求められる業務の一つとして、研究データ管理支援 (RDMS) が取り上げられ、その業務の実現のためには、研究プロセスへの介入が必要との指摘がなされたが、このことから、従来のような「来たものを受け入れる」という性格のものとは異なる、情報管理の新たな側面が見てとれる。この点を岡崎氏は「仕事の前提にある人間関係それ自体の中に入っていきような性格」と表現したが、様々な情報資源のオープン化を進めていくにあたっては、オープンにできるものとそうでないものとを切り分けていく作業が必要、との平野氏の指摘はとりわけ重要であろう。情報の生成時点からの関与が首尾よく進められるためには、平野氏のように、情報を生み出す側と管理する側双方の信頼関係が不可欠であるが、この点は、ともすれば、データ管理のための規則やポリシーのみが先行して規定されていくような流れの中において、改めて認識し、再考されるべき点である。

岡崎氏の提示した二つ目の論点は、「社会的な合意のもとでの適切な情報管理の諸条件とは何か」、である。この点に関しては、とくに、平野氏の報告のなかに、いくつかの重要な問題提起が含まれていた。まず、平野氏が取り上げたのは、アメリカ・アーキビスト協会における「社会正義 (Social Justice)」をめぐる論争であった。この概念のアーカイブズ学への導入には、これまで中立的で不偏的とされてきたアーキビストの専門職としての価値規範が問い直されていること、資料そのものというよりも、資料が生み出され、管理され、保存されるプロセスを取り巻く権力関係、社会関係への自覚が求められてきていることが背景にあるだろう。しかし、平野氏が明快に整理して論じた、「Social Justice」概念をめぐる論争の部分に関して、その論争のフェーズが 2013 年時点の倫理的使命としての社会「正義」から、2019 年時点の不正な状態を是正する「社会的公正」へと移り変わっていくなかで、専門職団体内部で、批判的な論者との議論まで拒否したり、特定の団体の資料の受入れに関わる論文まで批判されたことは、明らかに行き過ぎであると感じる。「アーカイブズを生み出す行いの正しさは、アーキビストにとってどれだけ意義を持つのか？」という平野氏の問いかけには逡巡させられるが、アーキビストは「記録を生み出す人」とともに、記録が生み出される‘出来事に関わる人’や（現在、そして、未来において）‘記録を使う人’との〈あいだ〉に存在する専門職であることを改めて想起したい。専門職としてのアーキビストは、単独で存在するのでも、記録をつくる人との関係性にのみ規定されるのでもなく、記録が生み出される出来事に関わる多様なアクターとのあいだに存在し、専門職コミュニティや学術コミュニティ、そして、利用者を通じて市民社会とも接する。そのような多様な関係性のなかにおいてこそ、専門職としての独立性、自律性が保てるのではない。ある者はなぜ、いかなる動機から資料・情報管理専門職となるのか、という点は、専門職の教育・養成と関わって、改めて問われねばならないが、専門職自身の置かれた権力関係の複雑性への内的な批判と多様な主体との開かれた関係性のもとでこそ、社会的公正の実現が目指されるものと考えられる。

それでは、「社会正義」が問われるような多様な社会関係のなかにあつて、資料・情報資源はいかに管理され、持続的に保持されうるのだろうか。この問題に関わるのが、平野氏の提起した、「アーキビストは資料・情報管理の専門職なのか?」、という二つ目の問いである。この問いに対して、平野氏は、アーキビストは単なる資料・情報管理の専門職ではなく、「資料を作り・使う人々とつながる／つなぐ仕事」を担う者なのだ、と答えた。そして、記録や情報の適切な管理には、記録・情報を保持している人との相互作用を考慮して取り組まなければならない、それゆえ、記録・情報管理とは政治的な作用なのである、と論じた。このことから、アーキビストには「情報の政治家」としての役割も求められてくるのでは、との指摘は、非常に説得的であるとともに、大沼氏が指摘したように、継続的な予算・体制確保のために所属機関に DA の存在意義を指摘したり、業者との交渉を行う際にも必要な資質であろう。また、人びとを「つなぐ」ことと関連して、フロアとの質疑応答の中からは、博物館等では収蔵しきれない、あるいは、収集の対象とはなっていない

いような地域の資料などをどう守っていけばいいのか、という切実な問題も投げかけられた。この点は、とりわけ困難で、かつ、差し迫る課題であるが、その解決策を見出していくにあたっては、資料情報機関の外部にある地域資料を‘みんな’で遺していくための、つながりをつくる何らかの仕掛けが必要とされているのではないか。このことに関連して、平野氏は以前、アメリカのアーカイブズ界で試みられてきた資料収集のための方法論である「ドキュメンテーション戦略」(Documentation Strategy)について議論されたことがあったが<sup>1)</sup>、こうした一機関の枠を越えて、地域社会全体として遺していくべき資料を、情報管理専門職と資料作成者や利用者、資源配分者などが一緒になって選定していく発想や試みにも、参考にすべき点が多くあるように思われた。

最後の三つ目の論点は、「情報管理の現場を担う専門職人材はどのように養成、キャリア形成されるべきか」、である。この点では、今回、登壇した三者がともに実務に携わる専門家として、それぞれのキャリアを歩みながら経験を積み、現在の職場で活躍している点で興味深い。特に大沼氏は、フランスの国立古文書学校に留学した経験を持っており、そうした経験から教育のあり方や新たな専門性を身につけるための継続的な学びの必要性について語られた。国立古文書学校では、1年目に情報管理の共通のベースとなる基礎的科目を学び、2年目にデジタルに特化した演習が行われるとのことであったが、平野氏も同様に、基礎的な原理・原則を理解した上で、それを常に批判的に問い直していくことの重要性に言及していた。平野氏は加えて、従来のような修論執筆をゴールとした教育よりも、課題発見・解決型、討論重視の教育を取り入れていくべきでは、と指摘されたが、専門職として現場を担う際に直面する様々な課題にどう対処すべきかが問われるなかにあつて、基盤となる原理・原則や理論をベースとした柔軟な発想と課題解決能力を身につけておくことは、これからの情報管理専門職の教育・養成に特に求められるところであろう。キャリア形成という点では、渡邊氏の方から、学位取得が即座に直接、採用・昇進や処遇の改善に結びつくケースはまれであるため、人事制度上の問題と合わせて考える必要性が示唆された。マネジメントに関わる情報管理専門職の育成と日本社会特有の人事制度のあり方や組織が求める人材とのギャップをどう解消していくかという問題は、非常に難しい課題だが、今後も継続して検討していくべき重要事項であろう。

今回のシンポジウムで、登壇者の中から共通して出てきたのは「つなぐ」という言葉であった。この言葉は、これからの情報管理専門機関や専門職のあり方を考える上で、非常に重要な要点を表しているように思われるので、最後に、「つながり」や「つなぐ」とい

---

<sup>1)</sup> 平野泉「戦後社会運動のアーカイブズとして一立教大学共生社会研究センターの経験と課題」、全史料協『会報』No.107、45-48頁。「ドキュメンテーション戦略」については、H.W. Samuels, 'Who Controls Past?', *The American Archivist*, 49(2), 1986, pp. 109-124; L. Hackman, 'The Origins of Documentation Strategies in Context: Recollections and Reflections', *The American Archivist*, 72(2), 2009, pp. 436-459, 等を参照。

った言葉をキーワードにシンポジウムを通して得たものを整理しておきたい。まず、新たなデジタル環境における情報管理においては、記録や情報の生成段階からの関与や情報インフラ全体のマネジメントが必要となってくるが、情報管理を首尾よく遂行するためには、システム構築を専門とする者やメタデータ管理を中心に担う者など、専門職同士の分業のなかで「賢く協働すること」（大沼）が重要とのことであった。また、情報管理とは、すなわち、情報が生み出される業務の人間関係のなかに介入していくことであり、そのマネジメントにあたって、人と人とのつながりのなかで専門職として振る舞うこと、信頼関係を構築していくことの重要性を改めて認識させられた。それと同時に、つながりを創り出していくことの重要性も、今回、強調されたポイントであった。すなわち、これからの社会における資料・情報の管理と継承のためには、従来のような一機関のみでの対応というよりも、「組織を超えた情報共有」（大沼）や、専門機関同士、専門職種での協働が重要となってくること、また、新たな情報管理専門職の資質としては、「集合知をコーディネートする役割」（大沼）や、多様で重層的なコミュニティのハブとして、情報だけでなく人と人をつないでいく役割（平野）が求められている、ということである。情報管理をめぐる問題は多岐にわたる喫緊のものばかりだが、“つながり”のなかにあることと“つながり”をつくること、この点を軸に、今回のような MLA の枠を越えた場で、共に考え続けていきたい。